

例えば、移転の時期の問題では、滝山城が機能していたことを示す最終の確実な文書の日付が、天正八年（一五八〇）閏三月四日（土方文書）であり、八王子城に移っていることを示す最初の文書の日付が天正一五年（一五八七）三月三日（岡見文書）であることから、この間に移転したと考えられています。

七年間という点、ちょっと幅がありますが、新しい文書が発見されない限り、この幅を詰めることは、今のところできません。しかし、氏照の動静と周囲の状況から見て、天正一〇年（一五八二）以前に移転した可能性は乏しいところから、天正一五年（一五八七）に近い時期に移転したものと考えられます。

それでは、築城の時期はどうでしょうか。築城時期については、後の記録や伝承に基づいたいくつかの説がありましたが、疑わしいものを除くと、だいたい三つの説にまとめられます。まず一番目は、元龜から天正の初めにかけて（一五七〇〜七三年ごろ）築城が開始されたという説、二番目に天正六年（一五七八）前後という説、三番目にはもっと落城に近いころ、すなわち天正一〇年（一五八二）以降という説です。

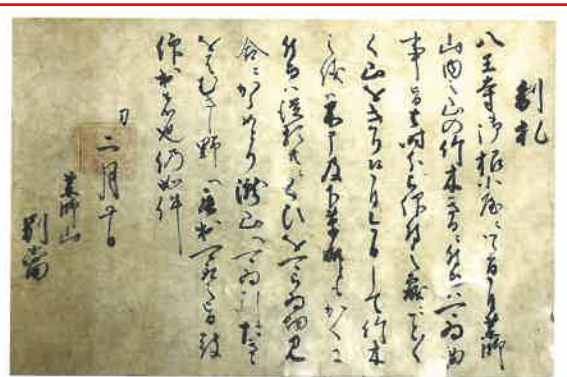
現在では、天正一〇年以降とする説が有力です。移転の時期が、天正一五年（一五八七）三月以前だから、遅くとも天正一四年末に近いころと想定されるので、そのころまでには、だいたいの大掛かりな工事、例えば氏照の館周辺の造成や主要な防御施設、曲輪や堀切の普請などのめどは付いていたと考えてよいでしょう。特に、天正一四年（一五八六）一月三日、豊臣秀吉は徳川家康に「関東惣無事之儀」などを申し付けたことを東国の諸領主に伝えたことによって、北条氏は、にわかに緊張を高めていきます。一五年正月早々から、領国内の総動員体制を固め始めるとともに、北条氏の本城、小田原城の大改修工事が始まっていて、氏照も小田原に詰めて、その監督にかりつきりであったので、八王子城の方は、重臣の狩野一庵にまかせて（岡見文書）、工事を続けていたはずで、天正一六年（一五八八）正月になっても、大工その他の職人衆に、八王子城の普請を特命していること（土方文書他）をみても、それは明らかだと思います。

こうしてみると、天正末年築城説が一番すっきりします。おそらく、本格的な築城工事は、早くとも天正一二年（一五八四）ごろから開始されたと考えてよいと思います。北条氏は、豊臣秀吉の東征を意識し始めて、この年小田原城を始め、武蔵・相模・伊豆の諸城の修築を開始するからです。それというのも、翌天正一三年（一五八五）同盟したばかりの徳川家康が、三月には秀吉と戦うことになった（小牧・長久手の戦い）からです。秀吉に関する情報は、おそらく、それ以前から十分に入っていたと考えられます。このように、結果的にいうと、八王子城は、豊臣秀吉を意識して築かれた城といってもいでしょう。

結果的というのは、どういうことかと言うと、氏照は、早くから自分の居城をこの地域に移そうと考えていたと思われるのです。その理由は、この由井の地域は、八日市場を中心とした地域が経済的に最も栄えていた場所であったからです。

また、大幡宝生寺や氏照自身が外護者となった牛頭山守護寺（後の宗関寺）、高尾山薬王院などの伝統的な寺院や鶴の森住吉神社、横川八幡神社など、宗教的な聖地でもあったからです。さらに、鎌倉街道や甲州への街道が集まる交通の要衝としても重要な地域でもあり、軍事的にも重要視されるべき地域であったのです。氏照領の支配の拠点として、うってつけの場所といえると思います。

それにしては、築城を始めるのが遅かったという疑問もあるかと思いますが、もともと、八王子城の南にある十里山には防衛隊が小仏峠を越えて奇襲し、ここを守っていた氏照軍を一蹴したのです（十里合戦）。このため、滝山城を包囲したときに、武田の別働隊が小仏峠を越えて奇襲し、ここを守っていた氏照軍を一蹴したのです（十里合戦）。このため、滝山城は、落城寸前まで攻められることになり（『甲陽軍鑑』）、氏照が新城を築く決心をしたと説明する人もいました。その後、八王子城側でも、実際の防衛施設が拡充され始めていたようです。しかし元龜二年（一五七二）この年には、武田と再び同盟関係が結ばれ、天正六年（一五七八）までは敵対関係になかったこと（上杉謙信死後、越後御館の乱の後、景勝と勝頼が同盟）、またその間は、氏照は下



寅（天正6年）2月10日 北条氏照制札（薬王院文書）

野方面の軍事責任者だったこともあって、この計画は進展しなかったと考えてよいでしょう。

天正六年（一五七八）高尾山を「八王寺御根小屋」と呼び（薬王院文書・写真）、天正九年（一五八一）「八王子番」として在番の守備兵が置かれていたこと（並木文書）も、その辺の事情を示していると考えていいでしょう。この間、折りにふれ、普請がおこなわれていたかもしれませんが、それは、本格的な築城というほどのものではなかったと思います。

そうこうするうちに、天正一〇年（一五八二）三月、織田信長によって武田勝頼が滅亡します。そして六月、その信長が本能寺の変で没すると、その跡をめぐって北条氏はすくさま上州から信州へ入り、甲州へと攻め込みます。そして浜松から甲州入りした徳川家康と三方月近くも対陣することになります。結局、一〇月に和睦が整って、翌年家康の娘が北条氏直に嫁いで同盟関係に入ります。和睦の条件の中心は、両者の領土協定でした。その結果、甲斐・信濃は徳川の、上野については北条の手柄次第つまり自力で獲得すると言ったことでした。したがって、北条氏の上野獲得は急務であり、これ以後も、氏照は相変わらず戦に多忙であつたのです。また、天正一〇年末には古河公方足利義氏が亡くなり、天正一一年（一五八三）には氏照自身が病気になるまで長患いしたからです。

やはり、八王子城の本格的築城は、それ以後と考えていいでしょう。天正一二年（一五八四）ごろから本格的築城工事が始まったとすれば、滝山城の持っていた氏照の居城としての全ての機能が整わないうちに、軍事的な機能を期待して、つまり戦闘用の城として移転せざるを得なくなる状況になってしまったのでしょう。八王子城は、結果的に豊臣秀吉との戦闘のために築かれた城といつていいのかもしれませんが、滝山城は、武田信玄に攻められた時の経験からして、守りにくい城なので、このような状況の中で八王子城のような雄大な山城を築こうとしたのは、いかにも氏照らしいといえましょう。

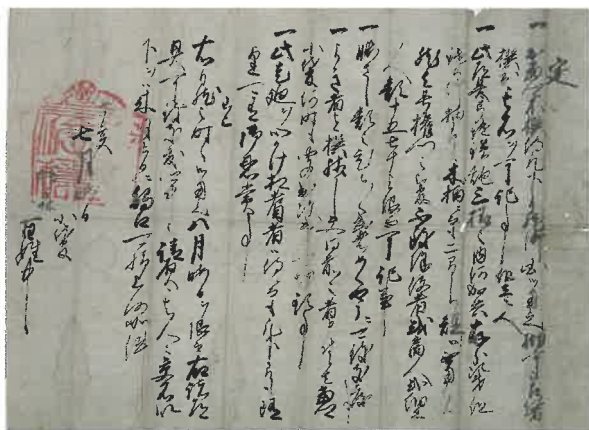
もともと、中世の城というものは、自分の支配領域に対する領主の役所、すなわち政庁という性格と、自分の居住する場である領主の家という性格を併せ持つ居館を中心として成立したものです。そして、特に戦国時代には、その支配領域をめぐる軍事的な緊張度に応じて、防御的機能を持つ「要害」と呼ばれる防御機能が、さまざまな形で結びついて構成されたものといえ

ます。例えば、滝山城は居館と要害がいつしよになっている城ですが、八王子城の場合には、居館が麓に造られていて、その背後の城山（比高約二〇〇m）が要害ということになります。どちらかという古いタイプの城といえます。

情報通でもあった氏照は、おそらく秀吉の戦い方をそれなりに研究していたはずですが、最後には、本城の小田原城での籠城戦になると考えたし、そう主張したかもしれません。そのためにも、各支城は、できるだけ少人数で持ちこたえる必要があると考えたのでしょう。滝山城のように、平面的な広がりが大きく、各曲輪の高低差が少ない城は、少人数での籠城には向きません。八王子城のように急峻な山城は、攻めにくいし、守りやすいのです。高低差が大きいので、上から攻撃する方が断然有利でしょう。さすが氏照です。しかし、それが悲劇的な結果となってしまいました。

天正一七年（一五八九）一月二四日付で、秀吉が宣戦布告します。きっかけは、一月三日上野沼田城の城代であつた北条氏邦の重臣猪俣邦憲が、対岸の真田昌幸の持ち城である名胡桃城を攻め落とすという事件を起こしたのです。真田からの報告を受けた秀吉により、惣無事（私戦停止）違反を咎められてしまったのです。

こうして、翌年三月、秀吉は京を出発し、ゆつくりと関東に向かいます。別働隊の豊臣軍は、加賀の前田利家を総大将として、越後の上杉景勝に真田昌幸ら信州勢を加えて、上州方面から北条の支城を攻め落とすしながら進んできて、降参した北条勢の兵士も加えて数万の軍勢が攻め寄せたといわれています。城主氏照は、精鋭部隊を率いて、小田原城に籠城して、八王子城を守っていたのは、横地監物・狩野一庵・中山勘解由などの老将に率いられた「腰さし類のひらひら武者めくよう」な支度で徴発された、農民・職人・山伏などを中心とする人たちだったようです（小松家文書・写真）。



丁亥（天正15年）7月晦日 北条家朱印状（小松家文書）